

朝日新聞社

長谷川伸全集
第七卷

相樂総三とその同志
相馬大作と津軽頼母

長谷川伸全集 第七卷

相築総三とその同志 ほか

全十六巻・第十回配本

一三〇〇円

昭和四十六年十二月十五日発行

著者 長谷川伸

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

装幀 原弘

帯挿画 岩田専太郎

長谷川伸全集
第七卷

目次

相楽総三とその同志

五

相馬大作と津軽頼母

三九

解説 村上元三

五七

相楽総三とその同志

昭和十五年三月—同十六年七月 『大衆文芸』 連載

自序

相楽総三という明治維新の志士で、誤って賊名のもとに死刑に処された関東勤王浪士と、その同志であり又は同志であったことのある人々のために、十有三年間、乏しき力を不断に注いで、ここまで漕ぎつけたこの一冊を、「紙の記念碑」といい、「筆の香華」と私はいつている。

初めここには論説を載せる氣であつたが取止めた。事情を明らかにすることは百の論説に匹敵するはずである。事情の明らかなさを欠くときにのみ論説の要こそあれと思うが故である。私は別に人あつて必要ある論述にあたる時、その資料を送ることに使命をおぼゆる。

昭和十五年三月から同十六年七月まで雑誌『大衆文芸』に、掲ぐること前後十五回、約八百枚、そのときの題名は「江戸幕末志」であつた、それを拾遺し削略し補筆し改訂し、分量順に加わつたものの、これは決定稿ではない。未定稿というほど弱きを感じているものでもない。第一稿と呼んでいる。私といえども、その時に於ける可能の知悉を永久不変と傲信するほど不遜ではない。

埋れたる人物と事蹟の掘返しに、尚つづくべく思うているわが第一稿の予定題目のみでも多きに過ぎるほど多い。それほど、有名と比べて劣らざる有名でない人物と事蹟とを、過去にもつ豊富さは、わが日の本独自の特色異彩で、世界に冠絶するものある所以の一つがここにもある。

明治維新の鴻業は公卿と藩主と藩士と、学者、郷土、神道家、仏教家とから成つたの如く伝えられがちであるが、そして又、関東は徳川幕府の勢力地域で、日本の西は討幕、東は援幕と印象づけられがちだが、その二ツとも実相でないことを『相楽総三とその同志』は事実にあつて弁駁表明している。士・農・工・商という称呼で代表している、全日本のあらゆる級と層から出て明治維新の大業が成つたのが実相で、そういう観かたを余りにもしないわれらの習癖に対し、無言の体当りを食わせた意味をもたない訳でもないのである。明治維新には博徒すら起つてゐる。更に極端な例を引けば盗賊すら心身を淨めて御奉公に精進した（嘘みたいに取り除けるといけないのでいうが、秋田藩隊長荒川久太郎附属折之助と手八が一例である）、こう云つては徒らに奇を求めていう嫌いがあるなら、別の方面からいってもいいのである。例えば『波山始末』をとつて無虚の心で臨めば、そこに姓のない戦死者刑死者が随所にあるのに心づくだろう、従来これらの安兵衛とか久蔵とか名のみ記された多くの人々を、無頼野合の徒として扱つたことはあつて

も、詮じ詰めて草莽の志士かどうかを探ったことがない。更に『草莽北越□□』（作者脱字）を取ってみると今いった答えが事実にあつて弁駁の実を挙げてゐるのに心づくであらう。

私はわずかに『相楽総三とその同志』だけにかつただけだが、文化年間にシンにその前後に跨る帝政ロシアの北方入侵について、詳密にもつと知ることを得たとしたら四民蹶起のありさまが、国民の胸に名曲のような響きを与えるに違ひないと思える。独りそれのみならず日本の内の大きな事の幾つかに、それとおなじきものが矢張り見出されるのではなからうか。

補足した点を一々挙げないが、その二、三を記すと、綾小路俊実が、京都脱走の日、庭田大納言に贈った訣別状がある、当時の綾小路の凜烈な氣宇がよく現れてゐる、馬淵友太郎・虎吉兄弟のことや、徴兵七番隊のことや、小諸、岩村田兩藩に於ける、それぞれの明治早々の内訌や、桜井常五郎等の死刑執行前後についてや、関東に於ける浪士取締役だった山内源七郎の死刑、追分の大黒屋主人とは、漢詩人金丸淵斎であることや、その養子恕平が平田学徒であつたことや、その他、約百カ所に新事実にあつる充足をした。

だが、依然として手と筆の及ばざるものが多い、伊勢松阪の山本鼎（西村謹吾）、土州だという小松三郎（福岡幸江）、

秋田の大木四郎、上州の金田源一郎（宇佐美庄五郎）、駿州の高山健彦（望月多仲）、秋田の竹貫三郎（菊池斎）をはじめ、その反対側では渋谷和四郎その他、記すべくして記し得ざるものがまだまだ多いことを遺憾とする。

『常ざむらい』という単行本が私にある、以前『サンデー毎日』に書いたものである。『相楽総三とその同志』の刊行はそれを抹殺するものである。あれには誤りが多い。

この稿にかかつてからも改修に着手中も、思わざるに難解を解かれ、はからざるに推判の材料を与えられた、これを私は神明の冥助と信じ感激を永く忘れまいとしている。買う氣に何のためになつたか我ながら合点のゆかぬ、古書店からの紙屑屋からの買ひものが、再三再四どころでなく打開探究に進めてくれたことなどを云う。

この一冊の校正を終えて語るべくして語り落したことが少なからぬを後悔している、たとえば足利の鈴木千里のごときである。そうして又思ふることの一つは、敗北以上の敗北者だった生残りの相楽の同志のうち、志渡長次郎の如く戸田恭太郎の如く無理な死処に飛びこんだ者とても私利私慾はすこしもなかった、その他の多くは山の草が冬がれて枯れる如く人知れず静かに世を去つてゐると思ふことと、雪冤に熱中した血縁の者達に反抗の毒々しさが毫末もないことである。これを執拗に誼（ぎ）い永き遺恨とし、對抗闘

争を事とする外国の人物と事蹟とにくらべ、雲泥の差を発見し、清冽を感じるもののみではあるまい。

資料に供したものを次に記す、どなたかの役に立つ時があるかも知れないと思うからである。疎笨の性がわざわざして手控不備となり若干の欠漏散逸さえある。

「雪冤手記(仮題)」「木村亀太郎」「赤報隊雜纂(仮題)」「(長谷川伸)」「薩邸浪士と赤報隊」(長谷川伸)「相楽総三関係資料」(諏訪資料叢書)「相楽総三資料(仮題)」「木村亀太郎」「薩邸浪士と赤報隊(仮題)」「(長谷川伸)」「岩船山浪人追討聞書」(藤野近昌)「小中村史談」(石井録郎)「白雪物語」(落合直文)「岡田直信談話筆記」(内藤信一郎)「戊辰国難記」(関重磨)「近世国民史・薩邸焼討の事情」(徳富蘇峰)「幕末の小田原藩」(片岡永左衛門)「戦亡の土の事蹟」(茂木滝蔵)「栃木史蹟」(大浦倉藏・高田安平)「南紀徳川史」(薩邸焼討事件真相「大泉漁史」)「薩邸焼討論を読みみて」(国分剛三)「朝比奈閑水手記」(神原富文談話)「福田誠好斎伝」(西山尚義遺書「丸山久成」)「堤和重談話」(根岸友山伝)「金子与三郎」(寺尾英量)「殿木春次郎小伝」(殿木三郎)「侯野時中談話」(小自在庵南園「平松理準」)「山田年貞談話」(芳賀直哉談話)「相楽総三と嚮導隊」(田沼佐)「南部広才伝」(芳賀矢一)「伊達宗城御手留日記」(陣幕久五郎伝)「幕末百話」(篠田鉦造)「井上頼閑談話」(五十年前「塚原靖」)「林源太兵衛談話」(近世造船史)「薩藩海軍史」(東郷吉太郎)「丁卯日記」(中根雪江)「下野史談」(可堂先生事蹟「塚越停春楼」)「掘金八談話」(甲

賀源吉伝「安保清康中将伝」(平井直談話)「川股茂七郎」(斎藤馨)「藍香翁」(須藤光暉)「薩艦砲撃始末」(横井時庸)「幕末軍艦咸臨丸」(文倉平次郎)「小川香魚資料」(松田正雄資料)「桜国輔資料」(唾玉集「伊原青々園」)「落合直亮談話」(中村恕助伝「若木武之助」)「御許山勤王記」(小野誠一)「八王子偉人伝」(藤岡翁伝)「西南紀伝」(黒竜会)「樺田直助詳伝」(埼玉県教育会)「埼玉史談」(霊山大山)「名越廻家遺稿」(樺田直助翁「神崎三郎)「二つの宝船」(沢太郎左衛門)「薩邸砲撃方略」(フリエーネ)「統藩翰譜後御事蹟」(白井重高)「鈴鹿郡野史」(柴田厚次郎)「昨夢記」(城多図書)「大原重実手記」(山科元行談話)「台山公事蹟」(久保和三郎)「佐藤清臣翁伝」(岐阜大井小学校編)「西本祐準資料」(水野丹波「水野純」)「油川信近談話」(大給亀屋伝)「塩川広平伝」(関東謀政日記「塩川広平」)「追分最後の日」(東山道嚮導隊「田沼稲里」)「岡谷繁実談話」(渡辺清談話)「上田市史」(偽勅使桜井常五郎)「北佐久郡史」(軽井沢町史)「由利公正談話筆記」(「世外侯事歴」(佐波郡史)「群馬県史」(足利市史)「山形県史」(岡毛宝鑑)「吉仲直吉談話」(栃木県史)「宇都宮市史」(秦林親談話)「先考小野良寛・伯父伊東甲子太郎・岳父鈴木三樹三郎」(小野圭治郎)「竹内廉之助資料」(官軍先鋒嚮導隊「油井七回子」)「金輪五郎資料」(軽井沢郷土史)「北越戦争実記」(野口団一郎)「回顧録」(塩谷良翰)「雙樹園」(岸伝平)「高松実村談話」(松のはまれ「清水謹一」)「館林叢談」(岡谷繁実)「田中不二磨伝」(伊地知正治伝「(野村鋼吉)「岩倉公実紀」(「伊那尊王思想史」(市村成人)「信州人物志」(佐藤寅太郎)「滋賀県神崎郡史稿」(回想の日本「(アーネスト・サトウ)「徳

川慶喜公伝」「北巨摩郡史」「飯田武郷」(笠井蘭山)「道俊隨筆」(林勘吉)「松本郷土訓話集」「甲斐国見聞日記」「近藤勇と土佐勤王党」(寺石正路)「三井家奉公事歴」「池田徳太郎」(沢井常四郎)「殉難録稿」「金井之恭伝」「近代月表」「晦結澁言」(堀内信)「落合直文号」(仙台郷土研究)「隈山貽謀録」(谷干城)「鳥尾彈三談話」「峡中治革史」(望月南涯)「贈位先賢伝」「戊辰戦亡人名録」「志士人名録」「某將軍昔日談」「長谷川昭道伝」「原保太郎翁と語る」(阿部道山)「下諏訪採拾(仮題)」(長谷川伸)「斎藤銳助談話」「信州追分宿と赤報隊」「金山太田誌」(富岡牛松)「安樂兼道伝」「日の丸船隊史談」(山高五郎)「大里郡史」「上毛及上毛人」「飯能郷土の榮」(吉田筆吉)「落合直亮と愚庵」(片桐頼智)「鹿深遺芳録」「東葛飾郡史」「秋田人物伝」(山方旭峰)「伊牟田尚平小伝」「秋田沿革史」「逸事史補」(松平慶永)「東郷平八郎元帥談」(原道大)「堀秀成小伝」(古河大観)「伊東祐亨小伝」(岩崎徂堂)「江戸城日記」「元帥東郷平八郎」(伊藤仁太郎)「東郷元帥詳伝」(小笠原長生)「思ひ出を語る」(小笠原長生)「報郷志士人名録」「能代乃武加志」(近藤八十二)「越奥戦争見聞録」(片岡士道)「黒駒勝蔵」(堀内良平)「喜入村郷土史」「手前味噌」(三代中村仲蔵)「佐久人の国家的発展」(山内竜三)「維新史料綱要」「竹内廉太郎及哲次郎伝」(渡桐雄)「竹内義之助文書」

昭和十八年一月早春

木村亀太郎泣血記

この稿は、薩摩屋敷に屯集した浪士が、明治維新に貢献したことを明らかにする目的のものである。世間誤って強盗とするその非を訂正し、下野岩船山附近の戦争、甲府城占領計画の失敗、相州荻野山中の陣屋討ち、芝三田薩摩屋敷戦争、江戸湾の海戦に多くの志士の演じた悲劇、信州追分戦争、信州下諏訪の赤報隊潰滅と、大体、以上の事蹟を調査報告するものである。

私はそれらの諸人物と何の縁故もないが、憐むべく傷むべきものがあるので、年来久しく拾聚もつしうした資料によって記述し、後來、編まる幕末史乃至明治史に、是正の材料に供えたいのである。



宮内省できょうは給仕の採用試験があるので、幾人も幾

人もの少年が、上気したり緊張したりして集っていた、その中にひとり背は高いが顔色がよくない少年がいた。係員がその少年の順番がきたとき、「幾つだ」と尋ねると「十二歳です」と答えた。この子は実は十三歳だった。他の少年にくらべて、発育が劣っている、それを知っていて一つ歳を隠したのである。すると係員は「来年お出で」といって次の番の少年を呼んで、それっきり相手にしなかった。少年はうなだれて門を出て行った。

翌年の春の給仕の採用日に、彼の少年が再びやって来た。昨年よりは成長しているが矢張り発育が劣っていた。それのみかこの子には、何処となく、陰が暗くさしていた。

今度は採用されて宮内省主殿寮の給仕で、日給十三銭に宿直料が十二銭、宿直は一日置きで宿直明けの朝帰って、翌朝出勤するのであるから、一カ月のうちに半月は昼から続けて宿直するものである。

この少年は亀太郎といった。父は木村河次郎といい、母は榮子という。河次郎の父は明治元年三月三日に、梟首けうしゅとなり、河次郎の母は自害して夫に殉じた。



父の河次郎は病弱だった。勤めに çıktこともあるが勤めきれなかった。筆蹟が美しいので写字をやったり絵がかけるので絵をかいた。茨城県相馬郡相馬町大字柵木さくぎの小島家に、四枚の襖にかいた絵が現存している。小島家は河次郎

の妻栄子の実家で、栄子の父は小島岩吉といい、明治維新前は柵木村の庄屋であった。そうして小島岩吉は河次郎の父の従弟だった。

栄子は河次郎に嫁いだ。そのときの木村家は巨万の富があった。実家は栄子の弟の高之助が嗣いだ。高之助の他に栄子には姉が一人、妹が一人あったという。

財産を失ってからの河次郎はいつも昏い顔をしていた。病弱のために昏い顔をしている以上に、底知れぬ昏さがあつた。何故、そんなに陰鬱な父であつたかということとは、後になってわかつたが、少年である亀太郎にはまだ判らずにいた。

河次郎は門口に刀剣鑑定看板を出し、稀に鑑定を頼みにくる人から、いくらかの鑑定料を得ていた。それは生計の足しに殆どならない、僅かばかりであつた。

家は河次郎の祖父が住んでいた広大な屋敷跡で、幾棟かの立派な建築は取崩され、土地は三人に分割して売払われ、以前は、小大名ではとても出来ない豪快な、くらしだつたころ、小者を住まわせて置いた長屋の端くれが僅かに片隅に残されていた。その長屋は四軒だか五軒だかで、河次郎親子が住んでいるのは、隣りとおなじ畳四枚に半畳の板の間、それだけで入口と台所とは隣りと共同だった。

壁一重の隣りは人力車の塗師屋で、その他は人力車夫と浅廻の剃身売りだった。この人達が月に一度ぐらい酒を買って集り、音の悪い三味線をだれかに弾かせ、一日中、騒

いだ。そういうときの河次郎は佯しそんな顔をして一日中口をきかずにいた。病床についてからのそういう日は、殊に悲しそうな顔をしていた。

人力車夫の中に小池というのがいて、夫婦の間に子がないので河次郎の子を可愛がった。使いなどを頼んで、ときどきお駄賃だといって小銭をくれたり、昼飯を食べさせた

りした。
或るときは、河次郎の家には米がなかったので、妻栄子が餛飩粉で団子をつくり汁に入れて食事を代えた、すいといである。そういう日がすくなくなつた。出入りの植木屋だった人が昔忘れず、ときどき訪れてきて、芋などを置いて行つた。その芋に米をすこし混ぜ、芋粥をつくって、飢えをしのいだ日が幾日も幾日もつづいた。

この長屋のどこにも電燈はなく、石油ランプをつかつていた。一晚の費用は一錢ぐらいだつたが、河次郎の家は貧しいのでランプが点きられないで、行燈をつかつた。

河次郎は多く病臥していた。妻の栄子は薄ぐらい行燈のそばで、夜更けるまで賃仕事に脇眼もふらず、昼のうちは何処へ行くのか、日傭取りの働きに出ていた。

夫婦の間に長男亀太郎の他に、一男(隆平)一女(千代子)が生れた。一家五人、ぐらしはいよいよ悪く、父は病臥の日が多くなり、母は日に日に衰えて行つた。



亀太郎は小学校の尋常科三年まで行った。一年のときも二年のときも、秋季の遠足に行ったことがない、同級生がみんな唱歌や軍歌をうたいつつ、楽しげに出発する声を遠くから聞いて、亀太郎は泣きたくなるのを^{こら}えて、幼い弟や妹の守りをするのが常だった、しかし、三年級限りで退学することになっていたので、三日も四日もいい出しかねていた末、思い切って父河次郎に、「どうか一ぺんだけ学校の遠足にやって下さい」と頼んだ。父は無雑作に「うん、よしよし」といった。働きに外へ出ていた母が帰ってきて、父からその話を聞くと、激しく反対した。やがて父と母とが口論となった。それは小学校の先生が「遠足に行くものは新しい草履^{ぞうり}をもっておいでなさい」といった、その草履^{ぞうり}が買えないのだった。それどころか弁当をつくるのに白米がなかったのだ、遠足に着てゆく着物もないのだった。九歳か十歳だった亀太郎は、父と母の口論を聞いて、大変なことになったと思い、母の前に坐り、「あしたの遠足に行きたくないから止めていいのです」といった。すると母がわつと泣き伏した。父は黙って眼を^瞬いて泣くのを辛抱していた。蟋蟀^{せせり}のいない晩だった。

亀太郎は家の中にいられなくなって、外へ出て、歩きつ泣きに泣いた。秋の空はその晩美しく澄んでいた。泣き疲れた眼がいつか星を仰ぎ見た。星はきらきら輝いてい

た。このとき以来、今日に至るまで亀太郎は、夜空に輝く星を仰ぎみて、何を考えるでもなく、じっと見つめることが好きである。

家へ亀太郎が帰ろうとすると、うしろに母がいつの間にか来ていて、「今まで一度も行ったことがないから、明日はゆっくり行っておいで、その代り麴町六丁目まで一緒においで」といった。母は大きな包を抱えていた。

麴町六丁目とは質屋へ行くことだった。赤坂見付下の弁慶橋をわたり、喰違^{くわだ}い下の交番までの間は至って淋しく、右には大久保利通遭難の記念碑、左は伏見宮家の竹藪で、母と子とはびったり寄り添って歩いた。

質屋からの帰りに母は亀太郎をつれて、一ツ木通りで、草履^{ぞうり}を買い、海苔^{のり}を買い、米も買って、そこから遠からぬ家へ帰った。二人とも夜露^{よるこ}にひどく濡^ぬっていた。

亀太郎は家へ帰るとすぐ、照る照る坊主を幾つもつくり、以前は曾祖父から父が譲られた、宏大な屋敷の庭の樹だったことのある、そうして今は、他人が地主である大きな柿の木^{かき}の枝に、あしたは天気になあれ、雨降るな雨降るなど念じて結びつけた。

翌日は快晴だった。亀太郎は始めて終りの小学校の遠足に行った。そうして三年から進級して四年になると、一日も登校せずに退学し、近所にいた山田という人に教えられ、宮内省の給仕を志願し、「来年お出で」といわれたのである。



宮内省の給仕に採用された亀太郎は、その年の十二月十一日に金五円の賞与をいただいた。

亀太郎はその五円をもって父を喜ばすものを買いに芝の露月町に行った。そこには刀剣商が七、八軒あったのである。亀太郎は刀を一口買うつもりだった。何故、少年の亀太郎が刀を買う気になったかというと、父の河次郎が刀剣をみるのが何より好きで、昼は戸棚のなかにはいり、行燈の灯皿をもちこみ、火を点して刀をじっと見る、そういうことをよく知っていたので、父を喜ばすには刀剣に限ると一図におもい込み、母にも相談せず、露月町へ廻ったのである。

亀太郎は或る一軒の刀屋で「刀を買いますから見せてください」といった。刀屋は客が子供なので相手にしなかった。仕方がないので又一軒へ行ってみたが、そこでも断られた。別な刀屋へ行ったがそこもまた相手にしなかった。漸く四軒目に行った刀屋で、鈍刀物を十本ばかり出してみせてくれたので、父がやるとおりを真似て、一本一本丹念にみたが、どれもこれもひどい鈍刀だった。すると奥から主人が出てきた。店のものが子供が刀を買いにきて、ためつすかしつしてみているとでも知らせたのだろう、主人は出てくるとすぐに亀太郎に「お前さん刀がわかるのかね」と尋ねた。亀太郎は父が大変に刀剣が好きであることや、

父は病床についていること、金五円いただいたからそれで買って帰って父を喜ばしたいと思うことなど、すっかり打明けると主人が、「感心だなあ」といったきり、暫時なにもいわずにいたが、「それならば良い刀が奥にあるから見せてあげる」といって、二十本ばかりの刀を、奥から持ってきて見せてくれた。その中から一口、寸端物だったが、備前長船勝光と銘が切つてあるのを買う気になり、値段を聞くと、「四両二分だが五十銭はご褒美にあげるから、四円でもいい」という。それではと四円払ってその刀を持って帰ろうとすると、「それはいけない、御規則であるからお宅へ届けさす」というのを無理に頼んで、刀屋の店の人に一緒に持ってきてもらった。

河次郎は果して大変な喜び方で、「亀太郎この刀は性がいいぞ、大変にいい掘出し物だ」といい、その後、毎日、戸棚の中で灯にかざして備前勝光を見ていた。

亀太郎は残りの一円で近所の道具屋にあった短刀を一口買って、又も父への土産にした、今度も河次郎は喜んで、「これは大変なものだ、今正宗と呼ばれた正近の作だ。これはいい。俺が死んだらこれだけは棺の中に入れてくれ」と笑談のように云って笑った。その笑い顔がひどく淋しかった。

それから二十日ばかり経って河次郎が死亡した。